

タイトル	木下利玄『銀』初版本評釈（中）
著者	田中，綾；山田，航；TANAKA, Aya；YAMADA, Wataru
引用	北海学園大学人文論集(56)：246(三七)-191(九二)
発行日	2014-03-31

木下利玄『銀』初版本評釈（中）

田中 綾・山田 航

キーワード 木下利玄、「白樺」、「心の花」、子どもの歌、子の夭折

【凡例】

- ・歌番号は本稿での便宜上のものである。
- ・歌番号の上に「*」があるものは、菱川善夫「木下利玄集」『日本近代文学大系55 近代短歌集』角川書店 一九七三年 以下、「菱川（一九七三）」で評釈された歌である。
- ・初出歌の傍線部は、初版本との異同箇所である。
- ・作品の旧漢字は新字に改め、明治・大正期は時代性を加味して元号表記を優先した。

「落葉樹」

*98・蕎麦の花しら／＼咲けり山裾の朝日のさ、ぬ斜面の畑に

【初出】「白樺」三卷十一号(大正元年十一月)「日光にて」 異同なし

〈通釈〉蕎麦の花がしら／＼と咲いている。山裾の朝日のささない斜面の畑に。

〈山田〉日光の旅行詠。確かに日光の周辺には蕎麦畑が多いらしい。「朝日のさ、ぬ」がポイントで、影になっている畑のことを詠んでいる。白い花と暗い影との取り合わせがここでも用いられている。

〈田中〉「蕎麦の花」は秋の季語。芭蕉に「蕎麦はまだ花でもてなす山路かな」(『続猿蓑』元禄十一年)がある。旅路の山で出会った蕎麦の花、という趣きが一致する。「落葉樹」一連は、大正元年十月、妻とその兄姉らとともに中禅寺湖に旅した折の連作と思われる。初出「日光にて」は連作で、全四十四首。当時の利玄の連作としては最も多い歌数であった。



木下利玄『銀』初版本 扉

集歌玄利下木

銀

後六料送額一金價定

此集に載められた歌の多くは吾と自撰誌
上は数筆採られたもので吾には枯雪の園から
願草の芽と採れ集りて行くやうに採りしめ
後て遠の火に燃いて行くやうに採りしめ
つて其類々持ち集られたるものであつた
めて其れを無に載せてある此等の歌は
のほほと無に載せてある此等の歌は
詩人は短歌即ち表現の確かと自由と加
的な所に在る内証と可い形式と論ずるもの
も亦其に著者の其の確かと自由と加
如何に著者の其の確かと自由と加
つ、あると云ふのであらずして其の確かと
に採りしめたるものは必ず本集を採りしめ
るべきものと云ふべきであらう

内容 ●初出の歌は『落葉樹』一連の歌である
●初出の歌は『落葉樹』一連の歌である
●初出の歌は『落葉樹』一連の歌である
●初出の歌は『落葉樹』一連の歌である
●初出の歌は『落葉樹』一連の歌である

初版発行 八五二四 堂陽洛 六三ノ五門外中野町東京 所行發
後六料送額 一元價定

「白樺」大正3年7月号掲載
『銀』の広告

99・埼玉のとある小村の停車場の柵さくのダリヤに秋の陽ひあつし

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・埼玉のとある小村の停車場の柵さくのダリヤに秋の陽ひあつし

〈通釈〉埼玉のとある小さな村の停車場の柵さくに咲いているダリアに、熱い秋の陽が注いでいる。

〈山田〉日光に向かう道中の埼玉での一首。「の」を連打してズームアップする手法を用いている。ひなびた田舎村と秋の陽を熱く浴びた赤いダリアとの組み合わせに妙味がある。

〈田中〉「埼玉」を過ぎて栃木の日光に向かう旅である。下の句は北原白秋の「君と見て一期の別れする時もダリヤは紅しダリヤは紅し」（『桐の花』大正二年）を思わせるが、「ダリヤ」は夏の季語。ここでは「秋」との配合で、季節はづれの感覚も創出されている。なお、「ダリヤ」は168にも登場。

*100・日光にちかき停車場杉の木の暗きが前にコスモス光る

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」 異同なし

〈通釈〉日光に近い停車場。杉の木の暗い陰の前にコスモスが光っている。

〈山田〉日光へ向かう道中での一首。杉の木は日光が近いことを告げている。やはり「陰」と鮮やかな花の取り合わせとなっているが、ここでのコスモスはわずかに「陰」を逃れて輝かしく咲くことに成功している。その点は98の歌と対照的である。

〈田中〉秋の季語「コスモス」は169、170歌にも登場。99と対のように、花と「停車場」とが取り合わされている。

101・文挾の停車場の前に一本のあかるき黄色の秋の木立てり

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・文挾の停車場の前に一本のあかるき黄色の秋の木立てり

〈通釈〉文挾の停車場の前に、一本の明るい黄色の秋の木が立っている。

〈山田〉日光での旅行詠。文挾の停車場の前に、明るい黄色に色づいた秋の木が一本立っている。文挾駅付近には杉並木があるらしいので、この木も杉の木かもしれない。

〈田中〉川田順は「木下利玄の習作時代」（『日本短歌』昭和十年四月号 以下、「川田（1935）」と記す）の中で、「利玄と言へば直ちに連想される所の四四調」として、明治三十二年から大正二年の「習作時代」に、「四四調を包含する作」が「十五首ある」と記している。この101歌もその一首として挙げられており、第四句「あかるき／黄色の」が四四調である。なお、101〜105は、初出と同じ並び順である。

*102・霧の粉空気にまじる林間をつめたき手していそぐ旅人

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・霧の粉空気に交る林間を冷たき手していそぐ旅人

〈通釈〉霧が粉状になって空気に混じっている林のあいだを、冷たい手をして急ぐ旅人よ。

〈山田〉「霧の粉」という表現は当時としては斬新な把握であっただろう。K音で頭韻を踏んでしゃきつとした清新なイメージを演出している。この旅人とは利玄自身のことであり、自らを客観視して物語の登場人物のようにして詠んでいる。

〈田中〉十月の霧の冷涼さが「つめたき手して」に直接的に表れている。写実的な一首でありながら、どこか物語性の

ある幻想的な作品に仕上がっており、目を引く。

103・うち向ふ山の傾斜のしみぐと目にしみ入りてかなしき夕べ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・打|向ふ山の傾斜のしみぐと目にしみ入りてかなしき夕べ

〈通釈〉向かい見る山の傾斜がしみじみと目に染み入って悲しい夕方である。

〈山田〉日光連山を見上げての歌だろう。山そのものではなくその傾斜に注目をする独特の視線がある。

〈田中〉接頭語「うち」は、語調を整えるほか、「ちよつと」という意味を添える。ふと、または、おのずと視野に入つた「山の傾斜」ではあつたが、その傾斜加減にしみじみと心が動かされている。山の傾斜を、絵画のように眺めているようだ。

* 104・黒き山へ夜の湖水こえ灯の色の月落ち行けり心をの、く

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・黒き山へ夜の湖水越え灯の色の月落ち行けり心をの、く

〈通釈〉黒い山へ夜の湖水をこえて灯りのように赤い色の月が落ちてゆく。心が恐ろしさに震える。

〈山田〉日光連山の一つ男体山と、その麓に広がる中禅寺湖を詠んだ歌と思われる。黒い山影へと、夜の真つ黒な湖水をこえて灯りのように赤い月が落ちてゆく。その神秘的な風景に、畏怖すらも感じたという歌である。自然美の向こうにある恐ろしさを直視した歌である。黒と赤の色のコントラストも特徴的。

〈田中〉男体山は、うっそうとした樹林が生い茂り、別称「黒髪山」。歌枕でもあり、源頼政に「身の上にかからむこ

とぞ遠からぬ黒髪山に降れる白雪」(『頼政集』成立年未詳) という歌もある。初句の「黒き山」は、その別称をふまえたうえでの表現だろう。

(四二)

105・隣室りんしつのサノサ節いものかなし湖水の岸の朝の旅籠屋

【初出】「白樺」三卷十一号(大正元年十一月)「日光にて」

・隣室のサノサ節いものかなし湖水の岸の朝の旅籠屋

〈通釈〉隣室から聞こえるサノサ節がとても物悲しい。湖水の岸の朝の旅籠屋にいて。

〈山田〉サノサ節とは明治時代に民衆に流行した、「サノサ」という囃子言葉の特徴とする民謡。風光明媚な岸辺の旅籠屋にいながらぎこえてくる大衆的な民謡に、上流階級出身の利玄は物悲しさを覚えたのだろうか。

〈田中〉川田(1935)に、「サノサ節」などの「卑俗な平語」を歌に取り入れることは、明治末期や大正の初め頃には「相当の勇氣と自信とが必要であつた。殊に、古典習練の過程を取つた竹柏園門下の私どもの仲間では、一層さうであつた」と書かれている。当時、新しい語彙を大胆に取り入れる利玄が注目を集めていたことがうかがえる。

106・落葉樹らくふじゆ葉落つる前の黄色なる森のあかるみわれらよこぎる

【初出】「白樺」四卷一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」

・落葉樹葉落つる前の黄色なる森のあかるみ吾等よこぎる

〈通釈〉落葉樹の葉が落ちる前の黄色い森の明るくなつてるところを、私たちは横切る。

〈山田〉日光に多い杉は夏に落葉するため、この落葉樹は秋に落葉するブナではないかと推測される。黄色に染まり明るく輝いている森を前にして、自分たちはその中に入らず横切るばかりという諦念があふれている。「よこぎる」は利玄

の歌にしばしばあらわれる行動であり、明るい世界に染まらない自己像を象徴している。

〈田中〉初出は十九首の連作であり、うち、三首が歌集未収録。この歌の前に、未収録歌「旅籠屋の火鉢に二人さし向ひ額の絵など見るくたびれ心地」という口語発想の一首があった。

*107・枝はなれ枯葉たゞよひ木のもとの大地につきぬなつかしいかな

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（日光の歌拾遺）」

・枝はなれ枯葉たゞよひ木のもとの大地につきぬなつかしいかな

「心の花」十七巻一号（大正二年一月） 曙会記事 兼題「砂」「眺」「大」

・枝はなれ枯葉たゞよひ木のもとの大地につきぬなつかしいかな

〈通釈〉枝をはなれて枯葉はただよい木の下の大地上についた。心惹かれるなあ。

〈山田〉枯葉が枝から地へと落ちてゆくさまをひたすら写生した歌だが、無常観がよくあらわれている。「なつかしい」は心惹かれるの意。「なつかしい」という口語調と「かな」という文語調の詠嘆がくっついている点に関しては曙会でも議論を巻き起こした。利玄の口語が少年時代への郷愁と結びつきがちなることを考えると、枯葉は故郷の両親から引き離された自分自身の隠喩なのかもしれない。

〈田中〉菱川（1973）補注二六一に、大正元年十二月十三日に開催された曙会の様子が詳述されている。また、「なつかし」という語が、『銀』中に十二首あり、「なつかしむかも」「なつかしいかも」「なつかしみつつ」「なつかしきかな」などさまざまな表出となっていることも例証されている。

108・姉たちの乗り来し俵この宿の帳場の前に並べるさびしさ

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」 異同なし

〈通釈〉姉たちが乗って来た人力車がこの宿の帳場の前に並んでいるさびしさよ。

〈山田〉帳場とは旅籠屋の会計をする場所であり、格子で外から区切られている。この「姉たち」とは、利玄にとってみれば妻の実家である横尾家の側の姉のことであるようだ。利玄は妻と結婚する際、横尾家が平民の身分(ただし地元では議員も務めていた名家ではあった)であったことからの悶着があったようだが、横尾家との関係は悪くなかったようである。

〈田中〉紅野敏郎「木下利玄第一歌集『銀』の草稿——白樺派の研究——」(『早稲田大学教育学部学術研究』三〇号 一九八一年十二月 以下、「紅野(1981「草稿)」と略す)によると、「兄と姉はこの場合は妻の側の横尾家の人びとである」とのこと。妻の姉と解釈してよいだろう。

川田(1935)では、108歌と同じくこの108歌も四四調の一首として挙げられている。結句「並べる／さびしさ」が四四調となっている。この「落葉樹」一連には、「姉」の歌が108・116・145と三首ある。

109・湖^{うみ}じりの山あかくと入日する湖水をわたる舟の旅びと

【初出】「白樺」三巻十一号(大正元年十一月)「日光にて」

・湖尻^{うみじり}の山赤々と入日する湖水をわたる舟の旅人

〈通釈〉湖の尻の山をあかあかと染まる。入り日する湖水をわたる舟の旅人よ。

〈山田〉中禅寺湖での舟遊びを詠んだ歌だろう。湖の端の山に日が落ちて、湖水が赤く染まっている。そのうえを舟でわたる旅人は、利玄自身のことである。ここでも自らを物語の登場人物のように描く手法を用いている。

〈田中〉102も「つめたき手していそぐ旅人」と、結句を「旅人」として自身を客観的に示していた。ここも同じくではあるが、「旅びと」と、漢字かな交じりの表記を試みている。

110・子供泣く暮る、湖水を渡り行く舟なる乳母のふところに居て

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（日光の歌拾遺）」 異同なし

〈通釈〉子供が泣いている。暮れてゆく湖水を渡りゆく舟という乳母のふところにいながら。

〈山田〉この日光旅行の年に利玄は長子利公を生まれて間もなくに亡くしており、泣いている子供の姿に我が子の幻影を重ねたのだろう。湖水をゆく舟を乳母のふところにたとえるところという大胆でスケールの大きい比喩を用いており、暖かいふところにいながら泣いている子供を優しく見守るような視線がある。

〈田中〉初出では、108・110・112の並び順である。

111・男体の山のくづれのあらはなる土に夕日のさせるあはれさ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」 異同なし

〈通釈〉男体山の山肌の崩れがあらわな土に夕日がさしている。しみじみと心ひかれることよ。

〈山田〉日光連山の一つ、男体山を詠んだ歌。山そのものではなく山肌の崩れにさす夕日に着目して、その情趣に心ひかれている。

〈田中〉完璧に美しい絵はがきのような光景ではなく、やや均衡を損なったような光景にこそ、しみじみと心がひかれている。独特の美意識が感ぜられるだろう。

112・男体のうへの青空しろき雲山の秋の日おだやかに暮る

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」

・男体の上の青空しろき雲山の秋の日おだやかに暮る

〈通釈〉男体山の上の青空、白い雲、山の秋の日はおだやかに暮れる。

〈山田〉次は男体山の上空部分に着目している。青空と白い雲というあまりに平凡な組み合わせがあるからこそ、秋の日のおだやかさの表現につながっている。

〈田中〉配合も常凡であり、習作のよう。「男体山」を直接歌ったものは、111・142があり、104の「黒き山」も男体山と解釈できる。

113・舟^{あか}上る湖水の岸のいさ、かの畑の野菜^{やさい}をなつかしむかな

【初出】「白樺」三巻十一号(大正元年十一月)「日光にて」

・舟^{あか}上る湖水の岸にさ青なる大根つくれり青のなつかし

〈通釈〉舟が上がる湖水の岸にあるわずかな畑の野菜に心惹かれることだ。

〈山田〉舟遊びをしたあとに上がった湖水の岸に小さな畑がある。わずかな生活のあとを見て心んだのだろう。初出では大根とはつきり詠んでいたが、野菜とぼかしている。大根は冬のイメージが強いので、季節感を重視したためだろうか。

〈田中〉初出からの大胆な改作が興味深い。具体的な「大根」と「青」の色彩を抑えたことで、「湖水」の透明感がより引き出されている。

*114・瞳吸ふ青き野菜に目をまかせタべつめたき湖ぎはに立つ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・瞳吸ふ青き大根に目を任せタべつめたき湖際に立つ

〈通釈〉瞳を吸われるほどに青い野菜に目をまかせて、夕方冷たい湖畔に立つ。

〈山田〉青という色彩を加え、よりビジュアル的な表現を進めている。瑞々しい野菜から冷たい湖岸へと水のイメージでつなげられている。初出ではやはり大根であったが、野菜と改めている。

〈田中〉前に同じ。

115・白樺のしろき木の肌森を行く夜の旅人のまみにつれなし

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・白樺の白き木の肌森を行く夜の旅人のまみにつれなし

〈通釈〉白樺の白い木の肌は、森を行く夜の旅人の目に素知らぬ顔だ。

〈山田〉「つれなし」は平然としている、冷淡だ、の意。白樺の木肌が白という当たり前の事実を繰り返すことで、その白さをより印象付けようとしている。白い木肌は女性的なイメージであり、冷たい態度をみせる女性のように見えなくなる。「夜の旅人」は利玄自身のことだろう。

〈田中〉131「白樺の白き木肌に手をふれて眼を見ひらきぬ秋風をきく」と上の句がほぼ似通っており、推敲過程で生まれた歌である。「夜」であるので、その純白さが昼間ほど迫り来るものではないということか。「白樺」は特に季節を問わず歌われ、若山牧水の「溪あひの路はかなしく白樺の白き木立にきはまりにけり」（『路上』明治四十四年）などがある。なお、雑誌「白樺」のタイトルを命名したのも木下利玄と言われている（五島茂『鑑賞 木下利玄の秀歌』短歌

新聞社、一九八六年 二〇頁。

(四八)

116・月になる夜の山路のつめきに姉の声などしたしみてきく

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」

・月になる夜の山路の冷きに姉の声などしたしみてきく

〈通釈〉月のあがる夜の山路の空気の冷たさに、姉の声などを慕わしく思いながら聞く。

〈山田〉「つめき」は「つめたき」の誤植と思われる。この姉も108同様、妻の姉のことであろう。夜の山路の肌寒い空気のなかで姉の声を親しみながら聞くというところに、強い心のつながりを感じられる。

〈田中〉人為を超えた自然界のただ中にいて、人間の「声」のなつかしき、親しさというものを改めて感じ取っているようだ。なお、初出では、この前に「谷川のひゞき暮れ行く橋詰の夜霧の中に草履結へぬ」(歌集未収録)があった。夜霧もたちこめていたのだろう。

*117・夜道行くわれ等の後について来る子供なつかし何処に行くや

【初出】「白樺」三巻十一号(大正元年十一月)「日光にて」

・夜道行く吾等の後について来る子供なつかし何処に行くや

〈通釈〉夜道を行く私たちのあとについて来る子供が可愛らしい。一体どこに行くのだろう。

〈山田〉あとについて来る子供に、亡くした愛児の面影を重ねている歌。「何処に行くや」は単なる方向への問いかけではなく、人生そのものの方向性への問いかけだろう。いつかは追い越され別れねばならない子供という存在への慈しみがある。

〈田中〉川田順『木下利玄』（雄鶏社、一九五七年 以下、川田（1957）と略す）に、この歌の鑑賞文がある。「『われら』利玄夫婦である。（中略）子供は土地の者で、どこからどこまで行くのかわからない。（中略）いずれは直ぐに別れねばならぬ。この可愛らしいものに哀感をそそられたのである」（四五頁）。

118・ちやうちんに昔噺の情調をなつかしみつ、夜の旅をする

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・提灯に昔噺の情調をなつかしみつ、夜の旅をする

〈通釈〉提灯に昔話の趣をなつかしみながら夜の旅をする。

〈山田〉この昔噺とは思いい話というよりは民話の類だろうか。提灯のほのかな灯りから感じられる懐かしい風情がよくあらわれた歌。初出は「提灯」と漢字だったが、「ちやうちん」というひらがな表記に変えているのも、やわらかさと懐かしい雰囲気を出すためだろう。

〈田中〉提灯が一般に普及したのは江戸時代のこと。前近代の暮らしぶり、情趣に心ひかれる様子が歌われている。

* 119・森の家灯をなつかしみ立ちよれば親子集ひひて火をぞ焚たきける

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」 異同なし

〈通釈〉森の家に灯りにひかれて立ち寄ると、親子が集まって火を焚いていたのだ。

〈山田〉森の中の家に灯りに導かれるまま立ち寄ると、親子で火をつけていた。利玄自身は失った親子の絆を眼前に目撃したさまを、「灯り」「火」といった暖かいイメージとともに描く。それは係り結びの強調を用いるほどに印象的な光景だったのだろう。

〈田中〉その「親子」とはどういう関係であったのかは不明だが、利玄のエッセイ「山の宿」(「白樺」三卷三号(大正元年三月))にも、宿屋の親子の話(二番目の娘が早世し、翌年姉娘も早世したという悲話)が書かれていた。他人であっても、「親子」の話に強く関心を持つ利玄の性向がうかがえる。

120・夜道するわれ等いとしも樅の木の深林を出で湖添^{うみそ}ひを行く

【初出】「白樺」三卷十一号(大正元年十一月)「日光にて」

・夜道する吾等いとしも樅の木の深林を出で湖添^{うみそ}ひを行く

〈通釈〉夜道をゆく私たちは気の毒なことだ。樅の木の深い林を出て湖沿いを行く。

〈山田〉中禅寺湖沿いの樅林を夜に出歩いて迷ってしまったのだろうか。暗く不安なイメージが伝わってくる歌である。

〈田中〉初出では、この前に「野の末の落葉木立に星ひかり顔しかむ迄冷たき空気」(歌集未収録)が置かれていた。秋の夜道の冷たさを強調し、次の歌からは、温泉のあたたかな湯気を際立たせている。

121・山上の温泉の湧く村の十月の夜の灯にせまる寒き山の気

【初出】「白樺」三卷十一号(大正元年十一月)「日光にて」 異同なし

〈通釈〉山上の温泉の湧く村の、十月の夜の灯りにせまる寒い山の気配である。

〈山田〉温泉と書いて「ゆ」と読ませる利玄独特の用法が登場している。温泉の暖かなイメージに、秋の山の寒い気配が近づいてくる。冬を予感させる歌である。

〈田中〉上の句から「の」でつないでいき、結句は体言止めで着地している。やや説明臭もただよう、習作ふうの歌。

122・山の温泉ゆの古旅籠屋の障子のみしろく目に入る朝のさみしさ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・山の温泉ゆの古旅籠屋の障子のみ白く目に入る朝のさみしさ

〈通釈〉山の温泉の古い旅籠屋の障子だけが白く目に入る朝のさみしさよ。

〈山田〉山の温泉宿を舞台とした歌。障子だけが白く目に入るということは部屋は薄暗く、日の出がやや遅くなっているということだろうか。「のみ」によつて白いものとして目には入らない言外のことをいろいろと想像させる。

〈田中〉125では「さびしさ」だが、ここは「さみしさ」と、より口語的な発音で表記されている。

* 123・旅籠出で、山にむかへば冬の息山にか、れり旅ご、ろ泣く

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・旅籠出で、山に向へば冬の息山にか、れり旅心泣く

〈通釈〉旅籠を出て山に向かえば、冬の息が山にかかった。そんな旅心地に泣く。

〈山田〉宿を出て山に向かうと、冬を感じさせる白い息が出てきた。冬を間近に控えた時期の旅の気持ちに切なさを感じたのだろう。

〈田中〉男体山の初冠雪は、例年十月中旬から下旬ということ、この「冬の息」は雪のことではないか。秋から冬に移行するさまを目の当たりにした感懐だろう。

124・山の木々沼尻ぬじりの木々も冬らしくもれる空の底なに並み立つ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・ 山の木々沼尻ぬじりの木々も冬らしく曇れる空の底に並み立つ
〈通釈〉山の木々も沼尻の木々も、冬らしく曇っている空の底に並んで立っている。
〈山田〉曇り空の山並みに近いあたりに木々が並び立つさまを詠んだもの。「空の底」とは空と山並みの間あたりのことだろう。斬新な把握である。

〈田中〉次の125とともに初句が「山の木々」である。うっそうと生い茂る木々を写実的にスケッチした歌だが、「冬らしく」の口語遣いは、利玄の持ち味でもある。

125・山の木々黒き黄色きかさなりてわれ一人を見下すさびしさ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・ 山の木々黒き黄色き重なりて吾一人を見下すさびしさ

〈通釈〉山の木々の黒いもの黄色いものが重なって、わたし一人を見下ろすさびしさよ。

〈山田〉黒いものは日を受けて影になっている部分、黄色いものは色づき始めた秋の葉だろう。黒と黄のカラーリングでイメージされるのは虎だろうか。光と影が混じりながら利玄の孤独を照射するさまが描かれている。

〈田中〉人語も聞こえないようなはるかな自然に見下ろされて、ふと「さびしさ」を感じる瞬間。同年夏にわが子利公を失ったさびしさも当然反映されているよう。

126・山したひ山に来ぬればふと切に浅草などのしたはしきかな

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・ 山慕山慕ひ山に来ぬればふと切に浅草などのしたはしいしいかな

〈通釈〉山を慕って山に来たならば、ふと切実に浅草などに心惹かれるのだ。

〈山田〉山に行きたいと願ひ山に行くと、逆に浅草などのような喧騒の街が切実に恋しくなる。非日常を求め旅をする都会人・利玄の心境があらわれている。

〈田中〉145の解説に記したが、「浅草の菊供養など下野の新聞に見ゆ都こひしき」（歌集未収録）という歌からの連想だろう。ちょうどその時期の、子どもたちも集まる年中行事を思い起こして、切ない気持ちになったようだ。

127・榧ひやに似しむくつけき木がしほらしき赤き実つけて秋の日に立つ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・榧ひやに似しむくつけき木がしほらしき赤き実つけて秋の日に立つ

〈通釈〉榧ひやに似た無骨な木が可憐な赤い実をつけて秋の日に立つ。

〈山田〉これは秋になると紫褐色の実をつけるイヌガヤのことではないかと思われる。ちなみに北海道には生息していない。無骨な雰囲気の木が可憐な実をつけているという意外さを驚きとした歌。

〈田中〉K音、とくに「き」音が連続し、耳に残る音調である。142に「榧」が歌われており、榧の木も「榧」に似ているので、この「むくつけき木」は榧であるかもしれない。

128・熊笹のうす黄が纏まとふ山の上の濃き藍色の空のするどさ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・熊笹のうす黄が纏まとふ山の上の濃き藍色の空のするどさ

〈通釈〉熊笹のうす黄色が纏まとう山の上の濃い藍色の空の鋭さよ。

〈山田〉秋になってうす黄色に染まった熊笹の茂る山。その上に濃い藍色の空が広がっている空に鋭い光を感じたという歌だろうか。文の係り関係がわかりづらいため読みにくい歌である。

〈田中〉色彩対比の歌ではあるが、「空のするどき」に、冷えた空気が鋭く肌を刺す感覚も重ね合わせているようだ。

129・空の藍山の黄色のくつきりとかたみにせめぎ秋晴に立つ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」 異同なし

〈通釈〉空の藍色、山の黄色とがくつきりとしていて、互いにせめぎ合いながら秋晴の中に立つ。

〈山田〉前の歌に引き続き、熊笹に覆われた山の黄色と空の藍色とを対比させている。こちらは対比関係がはつきりとしているので読みやすい。

〈田中〉前の歌の類想歌だろう。結句「秋晴に立つ」は、127の「秋の日に立つ」の類型でもあり、この三首は同じ推敲過程から生まれたものと思われる。

130・山火事に焼けたる木立白光る山のうへなるはつ冬の空

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・山火事に焼けたる木立白光る山の上なる初冬の空

〈通釈〉山火事で焼けた木立が白く光る山の上にある、初冬の空である。

〈山田〉光を浴びて白く光る山上には、山火事で焼けた木立がある。穏やかな光と激しい山火事のイメージが衝突して、初冬の空の雰囲気を作り上げている。

〈田中〉「山」が二か所に使われ、ややくどい印象ではある。前出のエッセイ「山の宿」でも、野火の火が森に移りは

しないかと心配する場面が描かれており、利玄が「山火事」や野火など「火」に鋭敏だったことがうかがえる。

* 131・白樺の白き木肌に手をふれて眼を見ひらきぬ秋風をきく

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（日光の歌拾遺）」 異同なし

のち、「心の花」十七卷四号（大正二年四月） 曙会記事 兼題「風」「空」「囚」 異同なし

〈通釈〉白樺の白い木肌に手をふれて、目を見開いた。秋風の音を聞く。

〈山田〉「白樺の白き木肌」は当たり前のことであるが、この無駄とも言えるリフレインによってより鮮明に白のイメージを浮き上がらせており、白い冬の予感にもつながっている。「眼を見ひらきぬ」で一旦句切れを入れたことで、秋風の途絶感が強調されている。

〈田中〉前出の115「白樺のしろき木の肌森を行く夜の旅人のまみにつれなし」では「夜の旅人」の眼は素っ気ないものであったが、ここでは、眼を見開いて白樺と交感している。対照的な作品であるところが興味深い。曙会では「風」の兼題で出詠していた。

132・落葉ふむ足をとどめてた、ずめば沈黙ひろがるまた歩み行く

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（日光の歌拾遺）」

・落葉ふむ足をとどめてた、ずめば沈黙ひろがる又歩み行く

〈通釈〉落ち葉を踏む足を止めてたはずんでいると、沈黙がひろがる。また歩みゆく。

〈山田〉初出では「とどめて」と誤植がある。また「ずめば」と漢字であったのをひらがなに直しており、やわらかなイメージを作り出している。この緊張感や気ままずい雰囲気からすると、妻ではなく姉とふたり秋の林を歩いている情景

なのではないか。複雑な家庭の事情があるので話しづらいことが多いのだろう。前の歌同様の四句切れにより沈黙に緊張感が生まれ、「また歩み行く」にただの沈黙以上の説得力がある。

〈田中〉 初出では132・131と逆の順である。動詞が多用され、映像的な一首となっている。

133・旅人の行く道さきにさ、やきてかなしみをよぶ落葉樹かな

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」 異同なし

〈通釈〉 旅人の行く道の先で、ささやいて悲しみを呼ぶ落葉樹なのだ。

〈山田〉 旅人とは利玄自身のことだろう。行く道の先々で葉をささやき鳴らしながらささやきかけてきて、利玄の悲しみを誘う落葉樹。秋のしずけさと沈黙の支配する空間をうまく描き出しており、かなりレベルの高い歌である。

〈田中〉 一連の章題が「落葉樹」であり、日光の旅の感懐を端的に表現している。「かなしみをよぶ」からは、やはり利公を失ったかなしみが想起されよう。

134・葉も花もすがれ果てたる秋草のなほ立てるあり山の道ばた

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・葉も花もすがれ果てたる秋草の猶立てるあり山の道ばた

〈通釈〉 葉も花もすっかり枯れ始めてしまった秋草の、それでもなお立っている姿がある。山の道端に。

〈山田〉 「すがれ」は「未枯れ」で盛りを過ぎて枯れ始めること。人生の盛りが過ぎて衰え始めることを指す場合もあり、ダブルミーニングかもしれない。盛りは過ぎながらもそれでも立ち尽くし続ける姿にあわれさを覚えたのだろう。

四句切れのきりつとした印象が技巧的。

〈田中〉「秋草」のさまをスケッチしながら、そこに心境も重ね合わせる境涯詠となっている。

135・しばらくは瀧に心を吸はれつ、秋の日なたにわれ等たゝずむ

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（日光の歌拾遺）」

・しばらくは瀧に心を吸はれつ、秋の日なたに吾等佇む

〈通釈〉しばらくは瀧に心をとられながら、秋の日なたに我らはたたずんでいる。

〈山田〉瀧の強い流れに心を奪われながら、秋の日なたにたたずむ二人。沈黙が支配する少し気まずい雰囲気、「日なた」のイメージで多少救われたように思える。

〈田中〉初出では結句が「吾等佇む」と漢字続きであったが、ひらがなに直したことによって、ゆつたりと「たゝずむ」ような心のゆとりが視覚的にも伝わってくる。

136・うつくしきひだをつくりて流れ行きながれ行く水に愛をおぼゆる

【初出】「白樺」三巻十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・美しきひだをつくりて流れ行き流れ行く水に愛を覚ゆる

〈通釈〉うつくしいひだをつくりて流れ流れてゆく水に愛を感じている。

〈山田〉前の歌に詠まれた滝の写生だろう。水の流れを「うつくしきひだ」とまるで絹や布のように表現し、愛をおぼえていると詠む。「流れるもの」「変わりゆくもの」への愛を感じられる。

〈田中〉初出では、この五首後に「うつくしき稍内輪なる歩みぶりなつかしいかな女のか」と（歌集末収録）という歌があった。女性の身体の「うつくし」さ、惹かれる心を加味させて鑑賞しても良いだろう。そうすると結句「愛をお

ぼゆる」に、官能性が増す。

(五八)

137・石楠木が蕾の用意早なりて山ふところの日だまりに立つ

〔初出〕「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」 異同なし

〈通釈〉シャクナゲのつぼみの準備が早くも整って山のふところの日だまりに立っている。

〈山田〉シャクナゲの開花時期は春先であるが、秋の時期に早くも蕾の用意をはじめたという。小春日和に日だまりが加わって暖かくなったからだろう。「蕾の用意早なりて」という助詞を省略した言い方が軽みを与えており、利玄のちよつと浮き上がった心を表現している。

〈田中〉川田(1957)に、この歌の鑑賞文がある。「蕾の用意に目をとめたのは、やはり植物愛好の利玄である。『蕾の用意』という俗語もよく消化されている」(四六頁)。確かに、「用意」という平俗な語をうまく取り入れた作だろう。

* 138・落葉松^{からまつ}の山をくだりて水ひかる高原に出つ^{マヤ}やや頭痛する

〔初出〕「白樺」三巻十一号(大正元年十一月)「日光にて」

・落葉松^{からまつ}の山を下りて水ひかる高原に出づ^{マヤ}稍頭痛する

〈通釈〉カラマツの山をくだって、水のひかる高原に出る。やや頭痛がする。

〈山田〉初出では「出づ」であり、「つ」を助動詞と考えると「出でつ」が正しいはずなので、「出つ」は誤植だろう。この高原は霧降高原だろうか。森と水との対比がこの歌にも登場する。「やや頭痛する」は気圧の変化のせいかな。助詞を省略していることで頭痛に臨場感がある。

〈田中〉140では「や、」の表記だが、ここは「やや」。ただし、両方とも初出では漢字の「稍」であった。歌集を見る

と、「やや」の二字目の「や」が行頭に來ていることから、あえて踊り字にしなかつたものと思われる。

139・砂みちに空氣草履の内輪なる足跡のこるなつかしきかな

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・砂路に空氣草履の内輪なる足跡残るなつかしきかな

〈通釈〉砂の道に空氣草履の内側を向いた足跡が残っている。心惹かれることだ。

〈山田〉空氣草履とは雪駄を改良してかかとの部分に空氣が入るようにした草履で、明治末期に流行したもの。新しい風俗を取り入れる利玄らしい名詞である。内輪とはつま先が内側を向いた歩き方（いわゆる内股）。女性や子供に好まれた履物であったという。初出では「うつきしき稍内輪なる歩みぶりなつかしいかな女のか」と（歌集未収録）が一つ後に収められており、女性の足跡であったと思われる。

〈田中〉136の解説に記したように、初出ではこの歌の後に「うつきしき稍内輪なる歩みぶりなつかしいかな女のか」と（歌集未収録）がある。「空氣草履」を履いた女性のかかどに、おのずと視線が行ったようだ。

140・パラソルに秋の日光る眼の痛さや、疲れつ、高原を行く

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・パラソルに秋の日光る眼の痛さ稍うち疲れ高原を行く

〈通釈〉パラソルに秋の日が光る目の痛さよ。やや疲れながら高原を行く。

〈山田〉パラソルというモチーフがハイカラで利玄らしい。過剰なまでのまばゆい光に「眼の痛さ」「疲れ」を感じているあたりが厭世的である。

〈田中〉明治期に日本に伝えられた「パラソル」(日傘)からは、やはり女性が連想される。妻もしくは姉が日傘をさしており、そこに反射する「秋の日」をまぶしく見つめていたのだろう。

*141・大いなる斜面に秋の日を受けて男体山の夕ぐれに立つ

【初出】「白樺」三卷十一号(大正元年十一月)「日光にて」 異同なし

のち、「心の花」十七卷一号(大正二年一月) 曙会記事 兼題「砂」「眺」「大」 異同なし

〈通釈〉大いなる斜面に秋の日射しを受けて、男体山が夕暮れの中を立っている。

〈山田〉「大」の題詠に沿って詠まれた歌。夕暮れどきの男体山の大きな斜面に、秋の日が差している情景を写生的に描いている。男体山という名も雄大さに一役買っている。

〈田中〉107と同じく、大正元年十二月十三日に開催された曙会に提出された歌である。兼題「大」がみごとに活きている。

142・男体の縦に紅葉に午後の日弱まりて行く暮のしづけさ

【初出】「白樺」三卷十一号(大正元年十一月)「日光にて」

・男体の縦に紅葉に午後の日弱まりて行く暮の静けさ

〈通釈〉男体山の縦に紅葉にさす午後の日が弱まってゆく日暮れどきのしづけさよ。

〈山田〉「縦に紅葉に」とM音で韻を踏んだリズムが心地よい。「男体」から導かれる男性的なイメージから始まり、弱々しいしづけさへと移行してゆくコントラストが巧みである。

〈田中〉「縦」は季節を問わず歌われ、この一連でも、120「夜道するわれ等いとしも縦の木の深林を出で湖添^{うみそ}ひを行く」

がある。

143・日光の宿のおばしま軒ちかく山高まれるなつかしきかな

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（日光の歌拾遺）」 異同なし

〈通釈〉日光の宿屋の欄干よ。軒近くなるまで山が高まってゆき、心ひかれることよ。

〈山田〉「おばしま」とは欄干のこと。「軒ちかく山高まれる」は日没の描写なのだろうか。現代ではややわかりづらくなっている感覚かもしれない。

〈田中〉初出では、この歌の前が107「枝はなれ枯葉たゞよひ木のもとの大地だいちにつきぬなつかしいかな」であり、「なつかしいかな」「なつかしきかな」と、似通った結句が連続している。この「落葉樹」一連を見ても、107・113・126・133・139そしてこの歌の結句が「くかな」であり、その多用は利玄の意図するところでもあったのだろう。

* 144・日光を二時間の後のちわれ等去るおもひさびしみ御おたまや霊廟を出づ

【初出】「白樺」三巻十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・日光を二時間の後吾等去る思おもひさびしみ御おたまや霊廟を出づ

〈通釈〉日光を二時間後には私たちは去るのだという思いを寂しみながら御霊廟を出る。

〈山田〉この御霊廟とは日光東照宮の霊廟だろう。日光を去る時間が近づいてきていることに気付き寂しさを感じている。それを感じたのが徳川家の霊廟だったというのは、自身が木下家の子孫であることを念頭に置いていたからだろうか。

〈田中〉初出では、この歌の前に「夕光たんぜん山の草原に卵色してわれに向へる」があったが、歌集未収録である。

「二時間」という具体的な時間を掲げ、そのような短い時間であったことを強調したのだろう。

145・鹿沼にて姉にわかれし汽車の中のそゞろにさびし野の靄を見る

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」 異同なし

〈通釈〉鹿沼にて姉とわかれた汽車の中がなんとなく寂しい。野の靄を見る。

〈山田〉鹿沼の駅にて義姉(妻の姉)と別れて東京へと帰る。旅の終わりの寂しさが、野の靄に託されている。

〈田中〉初出では、この歌の前に「浅草の菊供養など下野の新聞に見ゆ都こひしき」(歌集未収録)が置かれ、重陽の節句に浅草寺で行われる行事から「都」を思うという内容であった。「姉」との「わかれ」は、旅の身との別れ、東京への帰還をもほのめかしている。

146・日光は次第に遠み過ぎ去れる旅のかなしさ野ずる汽車行く

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」

・ 日光は次第に遠み過ぎ去れる旅のかなしさ野未汽車行く

〈通釈〉日光は次第に遠み過ぎていき、過ぎ去ってゆく旅のかなしさよ。野の果てを汽車は行く。

〈山田〉日光を遠ざかってゆく汽車を詠んだ歌。「野ずる」とは野の果ての意。遠ざかる汽車は利玄好みのモチーフのようだ。

〈田中〉車中詠であるが、自身が乗った「汽車」を鳥瞰的に見た結句が映像的で、動きがある。

147・野原ややなぞへになれり夕月の光たまるを汽車より見やる

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（日光の歌拾遺）」 異同なし

〈通釈〉野原がやや斜めになった。夕月の光がたまるのを汽車より見つめる。

〈山田〉「なぞへ」とは斜め、斜面の意。坂道に入り、野原が斜めに見えた。そこに夕月の光がたまる美しさに息を呑んでいる。車窓風景という新しい美を発見している。

〈田中〉「汽車」の語が多用された一連であり、習作の感があるが、千メートル以上の高地からなだらかな平地へと向かう傾斜の加減が写實的にスケッチされている。

148・寒き夜にかたまりあひて急ぎたる戦場が原の思ひ出かなし

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」 異同なし

〈通釈〉寒い夜にかたまりあひながら急いでいる戦場ヶ原の思い出が悲しい。

〈山田〉夜の汽車のなかが寒く、同行者（妻だろうか）と身を寄せ合いながら日光の戦場ヶ原湿原を進んでゆく思い出を回想している。戦場ヶ原は山の神が闘いを繰り広げたという伝説に因んでいる地名で、「身を寄せ合う」と「闘う」という正反対の行動が一首のなかで対立構造を持っている。

〈田中〉初出では、145と147、この歌をはさんで149・150の順であり、この148が間に割り込むように置かれている。ハイキングに適した湿原である「戦場ヶ原」だが、寒さもあり、また、時間的な制約もあって急ぎの歩きとなったのだろうか。短い旅を終えて日常に戻るが、忘れがたき「思ひ出」が確かにあったという構成意図がうかがえる。

149・埼玉の小停車場に汽車とまる橙いろのまばらなる灯よ

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」

・埼玉の小停車場に汽車とまる橙いろのまばらなる灯よ

〈通釈〉埼玉の小さな停車場に汽車はとまる。橙色のまばらな灯りよ。

〈山田〉現代とは違い農村地帯であった頃の埼玉であるが、少しずつ都市化が始まりだしていたのだろう。街灯の橙色の灯りがまばらに見える。近代社会の新しい美の風景である。

〈中田〉99「埼玉のとある小村の停車場の柵のダリヤに秋の陽あつし」は、日光への往路としての「埼玉」の風景であったが、ここは復路で、日常へ戻って行く手続きとしての「停車場」が詠われている。次の150と併せて、日常へと引き戻すシグナルとしての「灯」が用いられている。

150・東京に近づく汽車に日は暮れて埼玉あたり野の灯さびしも(大正元年十月)

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(日光の歌拾遺)」歌は異なるが、(大正元年十月)はなし

〈通釈〉東京に近づく汽車に日は暮れてゆき、埼玉あたりの野の灯りがさびしいことだ。

〈山田〉埼玉から汽車は進み、すっかり都市化された東京へと向かってゆく。こちらの「野の灯り」は民家の灯りかもしれない。利玄にとつてはもはや東京の都市的な世界が日常であり、農村地帯への旅は非日常と化していたのだ。

〈中田〉初出にはなかった「大正元年十月」という具体的な日付を盛り込み、一連を確たる「思い出」に位置づけている。日光は松尾芭蕉も歩いたゆかりの地であり、『銀』巻頭部が、〈利玄版『奥の細道』〉であったことも併せて鑑賞したい。

「地面」
ぢめん

*151・天気よき日曜の朝の勸工場日陰つめたく秋を感じる

【初出】「心の花」十七卷一号（大正二年一月）「草花」

・天気よき日曜の朝の勸工場日陰つめたく秋を感じる

〈通釈〉天気の良い日曜の朝の勸工場。日陰がつめたく秋を感じる。

〈山田〉勸工場とは明治・大正時代に流行した商業施設で、一つの建物の中で様々な商品の即売が行われていた。デパートの浸透に伴い廃れたという。うらかな日曜の朝の風景の中にわずかに涼しい場所を発見して秋の訪れを感じるといふ歌。勸工場のような当時の先端風俗を短歌に詠むのは珍しいことだったであろう。程無くして廃れていくものに秋を感じたというのも、偶然ではあるうが予言めいていて面白い。

〈田中〉初出では、この歌の後に「勸工場昼間のガスの灯の如く弱くかなしき生きやうをする」（歌集未収録）という寂寥感ただよう歌が置かれていた。はなやかな「勸工場」が、つねに「日陰」のつめたさや、可視化しづらい「昼間のガスの灯」のような、弱々しいものとセットとしてイメージされていることがうかがえる。

*152・ネルに着的 袷羽織の甲斐絹裏つめたき光沢のさびし雨の日

【初出】「白樺」三卷九号（大正元年九月）「夏の末」 異同なし

〈通釈〉フランネルの下の着の上に着的 袷羽織の甲斐絹裏、そのつめたい光沢のさびしい雨の日である。

〈山田〉袷羽織は表裏のある着物なので、裏が甲斐絹仕立てだったということだろう。どちらも舶来ものの素材である。表地よりも裏地の光沢に着目するところに、人目に触れにくいものに心を寄せる性質があらわれている。

〈田中〉「ネル」＝フランネルは、やわらかく肌触りの良い毛織物。そのふんわりとした印象と対照的なのが、「甲斐絹」

だろうか。菱川(1973)によると、裏付きの羽織である「袷羽織」は、その裏地に甲斐絹(細く目をつめて織った絹布で、光沢がある)を使用したとのこと。触覚を前面に押し出した印象的な歌。

153・わが心森の緑に浸りつ、その言ふことに酔へるさみしさ

【初出】初出未詳 『木下利玄全歌集』(岩波書店、大正一五年)では「大正元年」作として収録

〈通釈〉私の心は森の緑に浸りつ、その言うことに酔えるさみしさよ。

〈山田〉緑あふれた森に心を一体化させながら、自分の話すことに陶醉しているというナルシズムにさみしさを覚えるという歌だろう。

〈田中〉153〜155、161、163〜166、169については初出未詳(本歌集か)。紅野敏郎「木下利玄第一歌集『銀』の草稿——白樺派の研究——」(『早稲田大学教育学部学術研究』三〇号 一九八一年十二月 以下、「紅野(1981「草稿」)」と略す)六一頁では、もともとの草稿として、「わが心森の緑に帰りつ、その言ふ年に酔へるさみしさ」(傍線は引用者による)と書かれているが、初出に関してはふれていない。

154・橋の影うつれる河の洲に咲ける芹の小花の白のかなしさ

【初出】初出未詳 『木下利玄全歌集』(岩波書店、大正一五年)では「大正元年」作として収録

〈通釈〉橋の影が映っている河の洲に咲いている芹の小さな花の白のかなしさよ。

〈山田〉カメラワークのようにピントをどんどん絞ってゆく手法を用いている。大きく黒い橋の影から最終的に小さな芹の白い花へと向かう対比が効いている。

〈田中〉「芹」は春の季語で、七草の一つとして知られている。夏になってから白い色の小花をひらくが、短歌ではや

はり春に歌われることが多く、たとえば、「余年なきさまには見ゆれ頬かむり母が芹つむきさらぎの野や」（若山牧水『みなかみ』大正二年）など。夏に咲く「芹の小花」に目をとめたのは、利玄独特の視点。

前の歌と同じく、「紅野（1981「草稿」）」では、もともとの草稿として、「橋の影うつれる河の門に咲ける芹の小花の白のかなしさ」（傍線は引用者による）と書かれている。

155・水の音に心撫でられおとなしくあまやかさる、流のほとり

【初出】初出未詳 『木下利玄全集』（岩波書店、大正一五年）では「大正元年」作として収録

〈通釈〉水の音に心を撫でられて、おとなしく甘やかされているような気分になる、流れのほとりよ。

〈山田〉水の音に心を撫でられるという秀逸な擬人化手法がある。「おとなしくあまやかさる、」のもまた自らの心であらう。川を母として子供に戻ってゆくような感覚が見られる。

〈田中〉河の水流の音に癒される気持ちを、「あまやかさる、」を擬人化させたような表現がユニーク。前の歌と同じく、「紅野（1981「草稿」）」では、もともとの草稿として、「水の音に心撫でられおとなしく甘やかさるる流のほとり」（傍線は引用者による）と書かれている。

156・遠く行く夜汽車の窓の暗き灯のいくつも過ぎぬ踏切に立つ

【初出】「白樺」三巻九号（大正元年九月）「夏の末」 異同なし

〈通釈〉遠くに行く夜汽車の窓の暗い灯りがいくつも過ぎていった。踏切に立つ。

〈山田〉おそらく踏切に向かって歩いていて、遠くに夜汽車が過ぎ去ってゆく音がするのを聞きながらも、暗いのでわずかな窓の灯りでしかその実体を確認できない。夜汽車がすっかり行き過ぎて行った頃にちょうど踏切に着い

たのだろう。めまぐるしく忙しい雰囲気が伝わってくる。

〈山中〉動詞を多用し、自身の心の動きもそれに重ね合わせているようだ。初出では、「この後に「何事か待たる、如くおちつかぬ蒸し暑き夜の稲光かな」(歌集未収録)」と、夏の雷が歌われ、157に続けていた。

* 157・何処にか子供の遊ぶ声きこえ樹陰の闇の身じろぎもせぬ

【初出】「白樺」三巻九号(大正元年九月)「夏の末」

・何処にか子供の遊ぶ声きこえ樹陰の闇の身じろぎもせぬ

〈通釈〉どこからか子供の遊ぶ声がきこえ、木陰の闇が身じろぎもしない。

〈山田〉夕方の風景である。子供が元気に遊ぶ声だけきこえてきて、木陰の闇は微動だにしない。声がきこえていながらも、それが遥か彼方のことであり付近は静寂に満ちていることが表現されている。

〈田中〉夕闇が迫ってくる時間帯だろう。157と161の一連では、自身の幼少期をなつかしむような、ノスタルジックな世界が構築されている。

* 158・膝折りて湿りを持てる土の香をかげば子供の遊びなつかし

【初出】「白樺」三巻九号(大正元年九月)「夏の末」

・膝折りて湿りを持てる土の香をかげば子供の遊びなつかし

〈通釈〉膝を折って湿りを持つ土の香をかげば、子供の遊びがなつかしくなる。

〈山田〉我が子のことというよりも、利玄本人の幼少期への郷愁を覚えたのだろう。土の香りをかぐという行為には、白樺派の自然礼賛の通ずるものを感じる。

〈田中〉41「我が顔を雨後の地面に近づけてほしいまゝにはこべを愛す」と、やや類想的な歌である。「紅野（1981）「草稿」によると、この「地面」二三首の章題は、もともと草稿では「子供の遊び」であったという。その改題にふれて紅野は、「草稿の通りの『子供の遊び』のほうだが、この章はふさわしい気がする」と述べているが、次章「利公の爲めに」を引き立てるために「子供」の語を控えたのかもしれない。

* 159・をんなの子かごめくを声々に唄ふはかなし町の夕闇

【初出】「白樺」三卷九号（大正元年九月）「夏の末」

・女の子「かごめく」を声々に唄ふはかなし町の夕闇

〈通釈〉女の子がかごめかごめをそれぞれの声をあげて唄っているのはかわいらしい。町の夕闇である。

〈山田〉女の子たちが数人がかごめかごめを唄って遊んでいるのが聞こえてくる。そこに切ない郷愁を覚えて町の夕闇のイメージへとつながってゆく。157の歌同様に、子供の遊びは声のみで聞こえてきて遠くにあるものとして扱われる。

〈田中〉江戸末期に文献に表れる「かごめかごめ」の歌だが、その内容や示唆する内容には諸説がある。主に女兒が数人で歌いながら遊ぶものであり、「かなし」は、「愛し」。他方、「籠の中の鳥はいついつ出やる」という歌詞の「籠の中の鳥」に自身を重ね合わせた部分もあるかもしれない。

160・少年の記憶かなしも遊びすぎて闇のせまりしぬりごめのかげ

【初出】「白樺」三卷九号（大正元年九月）「夏の末」 異同なし

〈通釈〉少年の頃の記憶は切ない。遊びすぎて闇が迫ってきた塗籠の影。

〈山田〉「ぬりごめ（塗籠）」とは外壁まで土で覆う日本の伝統的建築法であり、主として納戸や寝室に使われた。遊び

すぎて時間を忘れているうちにやがて闇に飲み込まれてしまった瞬間のさびしさは、小さな恐怖にも似たものだったのだろうか。

〈田中〉「ぬりごめ(塗籠)」は、現代における納戸のようなもの。寝室にしたり、衣服や道具を収める場所であり、暗くひんやりした場所であったのだろう。それまで子どもらしく遊んでいたが、暗さと静かさにはっと淋しさを感じる瞬間をリアルに歌いとっている。

161・汽笛吹き羅芋屋の車街まぢとほる昼まのなごむ土曜日

【初出】初出未詳 『木下利玄全集』(岩波書店、大正一五年)では「大正元年」作として収録

〈通釈〉汽笛を吹いて羅芋屋の車が街を通る昼の、心の和む土曜日である。

〈山田〉羅芋屋とは煙管の修繕業のこと。江戸情緒の象徴として落語などによく登場する。明治・大正期も現役で活躍しており、煙管を掃除する際に笛のような音が出るのが特色であった。汽笛を吹いて羅芋屋の車が通るさまは下町情緒として親しまれたのだろうが、それと近代的な「土曜日」という観念との取り合わせも面白いものである。

〈田中〉「羅芋屋」は「らうや」とも読み、煙管たばこの修繕屋。澤宮優『昭和の仕事』(弦書房、二〇一〇年)によると、改造したりヤカーに道具一式を乗せて、煙管の手入れや道具の取り替えを商売とした。東京では、上野不忍池あたりにその「汽笛」付きの屋台が出ていたという。確かに手作業の職人の姿は、「こころのなごむ」ものかもしれない。なお、表記は「こ、ろ」が正しい。

153〜155の歌と同じく、「紅野(1861)「草稿」」では、もともとの草稿として、「汽笛吹き羅芋屋の車街通る昼のこころのなごむ土曜日」(傍線は引用者による)と書かれているが、「羅芋屋」は誤植だろう。

* 162・四十雀頬のおしろいのきはやかに時たま来り庭に遊べる

【初出】「白樺」三卷九号（大正元年九月）「夏の末」

・四十雀頬の白粉おしろひのきはやかに時たま来り庭に遊べる

〈通釈〉四十雀は頬のおしろいがくきやかに、時たま来て庭に遊んでいる。

〈山田〉四十雀が頬の部分が白い小鳥。それが時々庭に来て遊んでいることに心を慰められている。

〈田中〉頬の白い「四十雀」は、よく通る甲高い鳴き声が愛らしい。現在、東京都の目黒区ほかで四十雀が「自治体指定の鳥」となっており、当時の東京でもなじみ深い存在だったのだろう。

163・女の子頬ずりしたし鶏頭の毛糸の手鞠咲き出でにけり

【初出】初出未詳 『木下利玄全歌集』（岩波書店、大正一五年）では「大正元年」作として収録

〈通釈〉女の子に頬ずりをしたい。鶏頭の毛糸の手毬のような花が咲き出したよ。

〈山田〉前の歌に続いて頬のイメージをつなげている。鶏頭の花は赤く丸いもので確かに赤い毛糸の手毬を連想させる。そこから少女のイメージに結びつき、女の子に頬ずりをするほど可愛がりたいという気持ちにつながったのだろう。

〈田中〉「頬ずり」は、前の隠歌の「頬」からの連想だろうか。161の歌と同じく、「紅野（1981「草稿」）」では、もともとの草稿として、「女の子頬ずりしたし鶏頭の毛糸の手鞠咲き出でにけり」（傍線は引用者による）と書かれている。

164・鶏頭の黄いろと赤のびらうどの玉のかはゆき秋の太陽

【初出】初出未詳 『木下利玄全歌集』（岩波書店、大正一五年）では「大正元年」作として収録

〈通釈〉鶏頭の黄色い花と、赤いびらうどの玉のような花は、かわいい秋の太陽である。

〈山田〉前の歌から鶏頭の歌を続けている。鶏頭の花には黄色と赤があり、それをかわいらしい秋の太陽と見立てているところに面白さがある。「びらうどの玉」のような西洋情緒を感じさせる言葉は、北原白秋の影響を感じさせる。

〈田中〉「鶏頭」は秋の季語。北原白秋の『桐の花』にも、「ひいやりと剃刀ひとつ落ちてあり鶏頭の花黄なる庭さき」と、黄色の鶏頭が歌われている。前の歌と同じく、「紅野(1981「草稿」)」では、もともとの草稿として、「鶏頭の黄色と赤のびらうどの玉のははゆき秋の太陽」(傍線は引用者による)と書かれているが、「ははゆき」は誤植だろう。

165・羽織着る君が素足の冷たさのかはゆさいたみ胸にまつはる

【初出】初出未詳 『木下利玄全歌集』(岩波書店、大正一五年)では「大正元年」作として収録

〈通釈〉羽織を着る君の素足の冷たさの、可愛らしさが心痛いほどに胸にまとわりつく。

〈山田〉「君」は女性ととり、相聞歌として解釈する。裸足の冷たさに可愛らしさと同時に「寒がってはいないか」と心配する心の痛みも感じていたのだろう。

〈田中〉152「ネルに着る袷羽織の甲斐絹裏つめたき光沢のさびし雨の日」のように、「羽織」と「冷たさ」とが縁語のように使われているが、ここではそのさまに「かはゆさ」を感じている。「君の素足」を庇護したいという心情のあらわれだろう。前の歌と同じく、「紅野(1981「草稿」)」のもともとの草稿では、「素足」にルビがないが、あとは異同なし。

166・そらしたるまなざし追へば追はれつつしばたき居るまみのうるほひ

【初出】初出未詳 『木下利玄全歌集』(岩波書店、大正一五年)では「大正元年」作として収録

〈通釈〉逸らしたまなざしを追えば、追われながらもまばたきをしている目もとの潤いよ。

〈山田〉恋の歌のようにも読めるが、前後の構成からするとはつきりとはしない。目線を合わせようとすればそらされ

てゆくけれど、多分相手も本当は視線に気付いていて、まばたきをしている。そのときの目もとの潤いに着目するところにいじらしさがある。

〈田中〉表記は、正しくは「追はれつ、しばた、き居る」であろう。他の歌でも表記の混交が見られたが、『定本』でもこの表記のままである。前の歌と同じく、「紅野(1981「草稿」)」では、もともとの草稿として、「そらしたるまなざし追へば追はれつつ志ばたき居るまみのうるほひ」(傍線は引用者による)と書かれているが、「たき」は誤植だろう。

167・今しがた茶の間の時計十うちぬ厨にあまねき秋の光線

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(糸屑)」 異同なし

〈通釈〉今しがた茶の間の時計が十時を打った。厨房いっばいに秋の光線がさしている。

〈山田〉午前十時の台所は、まだ昼食の準備もはじめておらず無人で、秋の陽光いっばいにあふれているのだろう。のんびりとした四四調を用いて、平和な厨の風景を描いている。

〈田中〉川田(1935)で、101、108歌と同じくこの歌も四四調の一首として挙げられている。第四句「厨に／あまねき」が四四調となっている。なお、初出は四首連作であったが、この後の三首は、70〜72歌であり、この歌のみ離れた配置された。

* 168・ダリヤ咲くさけばさきたるさみしさに花の瞳の涙ぐみたる

【初出】「心の花」十七巻一号(大正二年一月)「草花」

・ダリヤ咲く咲けば咲きたるさみしさに花の瞳の涙ぐみたる

〈通釈〉ダリヤが咲く。咲けば咲くというさみしさに、花の瞳が涙ぐんでいる。

〈山田〉瞳のイメージは166と共通。グリヤが露をこぼしている状況を描いたのだろうか、そこにどうしようもないさみしさをみてとっている。初句切れが強い諦念の印象を与える。

〈田中〉初出では「咲」の漢字表記が続いていたが、「さ」のひらがなに直したことで、その下の「さみしき」が視覚的にも際立つこととなった。

169・疲れたる光の中にコスモスのあらはに咲ける午後頭痛する

【初出】初出未詳 『木下利玄全集』(岩波書店、大正一五年)では「大正元年」作として収録

〈通釈〉疲れたる光の中にコスモスがあらわに咲いている午後、頭痛がする。

〈山田〉光が弱まるさまを「疲れたる」と表現しており、弱々しいコスモスの花が凜と強く見える瞬間と対比している。「頭痛」は当時としては俗語に近く、「午後頭痛する」と助詞を省いた片言的な物言いになっているところに、かすかなユーモアが見える。

〈田中〉138「落葉松からまつの山をくだりて水ひかる高原に出つまやや頭痛する」、また、妻を歌った203「若き母かしら頭痛むに手を当て、むかふわが子の墓標の白さ」にも「頭痛」が歌われている。石川啄木にも、頭痛から発想されたと思われる「何がなしに／頭のなかに崖ありて／日毎に土のくづるごとし」(『一握の砂』明治四十三年)という歌があるが、「頭痛」という俗語をそのまま歌に取り入れたのは、やはり利玄の新しさであろう。「紅野(198)「草稿」」のもともとの草稿でも異同なし。

*170・コスモスの花群がりてはつきりと光をはちくつめたき日ぐれ

【初出】「心の花」十七卷一号(大正二年一月)「草花」

・コスモスの花群がりてはつきりと光をはぢく冷き日ぐれ

〈通釈〉コスモスの花が群がってはつきりと光を弾く、つめたい日暮れである。

〈山田〉コスモスの歌が続ぎ、花がくつきりと鮮やかなイメージとして描かれることも前の歌と共通する。「光をはぢく」は新鮮な表現である。

〈田中〉「はぢく」は、弾く意味であるので、「はじく」の表記が正しい。『銀』一連を読み通すと、仮名遣いにはあまり拘泥しなかったようにも感じられる。

*171・青き露灯ともし頃の冷えくくとすこやかなる身の食欲そゝる

【初出】「心の花」十七卷一号（大正二年一月）「草花」 異同なし

〈通釈〉青い露は灯がともる頃に冷え冷えと広がり、すこやかなこの身の食欲をそそる。

〈山田〉夕闇となりランプが灯り始める頃に青い露がかかって冷え冷えとする。それは夕食時の合図でもあるから食欲が湧いてきたということだろうか。冷え冷えとした風景に健康で食欲豊かな我が身を対比するところは、ユーモアを意識したのかもしれない。

〈田中〉川田（1935）で、101、108、167歌と同じくこの歌も四四調の一首として挙げられている。第四句「すこやか／なる身の」を四四調と解したのだろうが、形容動詞的な「すこやかなる」を「すこやか」で切ることは若干問題がある。そうだ。

172・菊切れば葉裏にひそむ虫のありうごきもやらぬこの哀れさよ

【初出】「心の花」十七卷一号（大正二年一月）「草花」

・菊切れば葉裏にひそむ虫のあり動きもやらぬこの哀れさよ

〈通釈〉菊を切つたら葉の裏に潜んでいる虫が居た。ろくに動きもできないこの哀れさよ。

〈山田〉葉の裏に潜む虫という小さな命に同情を寄せている歌。小さな生き物に興味を持つ傾向が利玄にはみられる。

〈田中〉80「黒き虻白き八つ手の花に居て何かなせるを臥しつゝ見やる」もあつたが、花びらや葉の裏にひそむ虫のよ
うな小さな存在を歌にする、利玄独特のまなざしがある。

*173・森の鳥わがかなしみに針さして鳴く声いたし山をあゆめば

【初出】「心の花」十七卷一号(大正二年一月)「草花」

・森の鳥わが悲みに針さして鳴く声いたし山をあゆめば

〈通釈〉森の鳥が私のかなしみに針をさすように鳴いている声が痛々しい。山を歩いてみると。

〈山田〉山歩きをしているときに聞こえてきた森の鳥の鳴き声が、おそらくは細く鋭いものだったのだろう。それを「わ
がかなしみに針さして」と隠喩を用いて表現しているところに技巧がある。

〈田中〉この「わがかなしみ」の歌が、次章の、初子を失った悲痛の一連の前に置かれたことで、より深い「かなしみ」
を引き出している。



『銀』 献辞



「利公の為に」冒頭三首

「利公の為に」

*174・あすなろの高き梢を風わたるわれは涙の目をしばた、く

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為に」

・あすなろの高き梢を風渡るわれは涙の目をしばた、く

〈通釈〉あすなろの木の高い梢を風がわたってゆく。私は涙ぐむ目をしばたたく。

〈山田〉ここからは愛児利公が亡くなったときの歌となる。あすなろは高く伸びる木であり、ヒノキに似ていることから「明日（ヒノキに）なろう」と願う木であるという俗説がある。ここでは大きく成長するものの象徴であり、それが叶わなかった愛児との対比となっている。

〈田中〉この歌の鑑賞は、日笠祐二「木下利玄」（吉田精一、本林勝夫、岩城之徳編『現代短歌評釈』学燈社、一九六六年 所収）に詳しい。それによると、当時の木下家本邸は、東京の淀橋町（現、新宿区）にあり、「栗拾いもできるほど広い庭を構えていた」。その庭に、「あすなろ」の高木があったのだらう。鑑賞文には、利玄には子どもの歌が多いが

いずれも「他人の子供」であり、自身の生きている子どもの歌は「雑誌には発表しているが歌集には一首もない」ともある。利公の夭折による精神的な傷痕の大きさをおのずと語っているよう。

*175・愛らしき眼を見はりつ、息づける苦しき様を見るに堪へかね

〔初出〕「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

〈通釈〉愛らしい目を見開いて息づいている、苦しそうな姿を見るに耐えかねた。
・愛らしき眼を見はりつ、息づける苦しき様を見るに堪へかね

〈山田〉利公は未熟児だったらしく、出生のときより弱々しかったようである。それでも必死に生き抜こうと目を見開いて息をしている様子の痛々しさは、見るに見かねるものだったようだ。

〈田中〉初出では、六頁にわたって利公の誕生と死に至った経過が文章で綴られていた。前年大正元年の「八月六日の午前零時半」に生まれたが、月足らずであり、体重が「四百六十五匁しかなかつた」。一七〇〇グラム余の小さな新生児であり、まずは「乳がすむと可憐な呼吸をしながら、パチ／＼眼をあけて自分を見上げたりした」。だが、次第に衰弱し、それでも眼は見ひらいていた。「死ぬと極つた赤児が、パチ／＼見ひらいて、自分を見上げる眼と自分の眼と逢ふ時は、可哀想でたまらなかつた」。まさにその心境の歌である。

*176・人皆に見捨てられたる床の上にわがをさな児が眼をひらきあゐる

〔初出〕「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」 異同なし

〈通釈〉人みなに見捨てられたような状態で置かれた床の上にわが幼い子供が目を開いている。

〈山田〉床の上に横たわっている自分の赤子を、「人皆に見捨てられたる」と感じたのだろう。被害妄想気味であるが、

我が子を助けてやりたいと願う自分の苦しみを誰も理解してくれないという強い悲しみがこういう表現にさせたのだ。
〈田中〉川田（1957）に、この歌の鑑賞文がある。「初句『人皆』とあるが、両親はもちろん除外されている。利公は？何も知らぬ赤ン坊、生も死もない。けれども『眼をひらきみる』生きているのだ。無心なるが故に、両親は一層耐えられない」（四四頁）。

*117・人目なき処に妻とかくれつ、泣きくづれなばやすからましを

【初出】「白樺」四巻八号（大正二年八月）「利公の為に」

・人目なき処に妻とかくれつ、泣きくづれなばやすからましを

〈通釈〉人目のないところで妻と隠れながら泣き崩れることができたなら、少しは心がなぐさめられただろうになあ。
〈山田〉人目の届かないところに行つて、妻と二人愛児の死を悲しみ泣き崩れることができたのなら慰められたのだろうという反実仮想。そういう姿を外にさらすことができない社会への悲しみもあるように思う。

〈田中〉八月十日に死去。産後すぐの妻に伝えることが憚られ、十一日の夕方になってから死を伝えたという。葬儀は翌十二日。あまりに急なスケジュールであり、夫婦で涙に暮れる時間すら持てなかつたのであろう。

*118・夏の中にひそめる秋を感じつ、涙ぞいづる子の死にし後のち

【初出】「白樺」四巻八号（大正二年八月）「利公の為に」

・夏の中にひそめる秋を感じつ、涙ぞいづる子の死にし後

〈通釈〉夏のなかに潜んでいる秋を感じながら、涙が出てくる。子供の死んだ後は。

〈山田〉夏の中にわずかな秋の気配を感じながら、夏の死と重ねるように子供の死を悲しんでいる。倒置を用いて悲痛

な感情を表現している。

〈田中〉次の歌と重なる内容ではあるが、子の死を季節の推移に重ね、哀調をいっそう濃くしている。

179・程もなく秋くることのわびしさと面おもやつれせし妻しのび泣く

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・程もなく秋くることのわびしさと面やつれせし妻しのび泣く

〈通釈〉程なく秋が来ることのわびしさと相伴うように、顔がすっかりやつれてしまった妻がしのび泣いている。

〈山田〉前の歌と同様、季節の移り変わりを愛児を喪った悲しみに重ねている。出産と死が続いてやつれてしまった妻の描き方が、真に迫っている。

〈田中〉妻も、死を知らされる前夜、「赤児の臨終だらうと思つてわざと寝なかつたさうだ」とある。眠れずにいたことでも「面やつれ」し、かつ、ものさびしい季節が近付いてくることのでいっそう涙がわいてきたようだ。

180・子を失ふ親の悲みそは遠きこと、思ひしを今日われに来し

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・子を失ふ親の悲みそは遠き事もと思ひしを今日われに来し

〈通釈〉子を失う親の悲しみ、それは遠いことと思つていたのに、今日私のもとに来た。

〈山田〉自分には関係ないと思つていた子を喪う悲しみが、自分にやって来てしまった。時間がたつてある程度冷静になつてからの歌だろう。「そは遠きこと、」の部分の句またがりが、心情の変化と重なつていて技巧的である。

〈田中〉死は免れないと悟つたころ、利玄は「他所では人目があるから、便所に行つて思ふさま涙を流した」。まさか

そのような涙を体験することになろうとは、という感慨を、一年を経てようやく歌にすることができたのだろう。

181・待ち居たる九月の末は未だ来^こず早くわが子は死にて世になし

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為めに」

・待ち居たる九月の末は未だこ^こず早くわが子は死にて世になし

〈通釈〉待つていた九月の末は未だに^こ来ず、我が子はもう死んでこの世にいない。

〈山田〉亡くなった利公は未熟児であり、本来は九月末に生まれる予定だった。それが予定よりずっと早く生まれ、亡くなってしまった。本来の出産予定日はまだ来^こていないのにその子供はすでにこの世にいないという、矛盾への悲しみに満ち溢れている。

〈田中〉早産による思いも寄らぬ不幸。現代にも通ずる普遍性があり、それだけに、絶唱でもある。

* 182・脇差のすこしぬきたる刃の上に蓮華^{れんげ}ぞうつる凶事^{へや}ありし室

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為めに」 異同なし

〈通釈〉脇差の刀の少し抜いてある刃の上に蓮の花が映っている、凶事のあった部屋に。

〈山田〉遺体の上に刀を置いて故人を守る魔除けとするという葬儀の風習がある。守り刀と呼ばれ、武家社会の風習である。刃の上に映る蓮華は、仏花だろう。冷たい刀と鮮やかな花との対比が、「凶事」すなわち我が子の死という体験と重なっている。

〈田中〉菱川（1973）によると、「脇差」は魔除けのために死体の上に置いたものという。

*183・おとなしき死顔しにがほを見れば可愛さに口きかずとも傍そばに置きたや

【初出】「白樺」四卷八号(大正二年八月)「利公の爲めに」

・おとなしき死顔を見れば可愛さに口きかずとも傍に置きたや

〈通釈〉おとなしい死に顔を見れば、あまりの可愛さにたとえ口をきかないとしても傍に置いておきたい。

〈山田〉我が子の死に顔は安らかで可愛らしいものであり、たとえ口をきかないでもいいから傍に置いておきたいとまで強く思った。強烈な思いに満ちている歌である。

〈田中〉「十一日の晩安らかな死顔を見ると可愛らしくて、その儘家に置いときたいやうに思った」とも綴られている。

*184・顔のうぶ毛腕のうぶ毛の可愛さよいく日の後のちも眼に残るべく

【初出】「白樺」四卷八号(大正二年八月)「利公の爲めに」

・顔のうぶ毛腕のうぶ毛の可愛さよいく日の後も眼に残る可く

〈通釈〉顔の産毛、腕の産毛の可愛さよ。何日も後にもきつと眼に残ることだろう。

〈山田〉「べく」は「推量」の意ととった。前の歌に引き続き、まだ死んだとは思えない我が子の遺体を見て悲しむ歌である。

〈田中〉初出では、この歌の前に「目のよきを髪かみの黒きを人ほむるその度毎に湧く涙かな」があったが、歌集未収録である。

* 185・やはらかにをさなきもの、おごそかに眼つぶりて我より遠し

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為に」

・柔かくをさなきもの、おごそかに眼つぶりて我より遠し

〈通釈〉柔らかに幼いものがおごそかに眼をつぶって、生きている私から遠い場所へと行ってしまふ。

〈山田〉「やはらかにをさなきもの」は赤子のこと。見開いていた目もついてつぶってしまったときに、もう手の届かない遠い場所へ行こうとしていることを認識したのだろう。

〈田中〉生前パチパチと見開いていた「眼」をつぶったときに、死の厳粛さが、より濃厚となった。

* 186・うけ口のくちびるの色変れるに水をそ、ぎて見つめ見つむる

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為に」

・うけ口の唇の色変れるに水をそ、ぎて見つめ見つむる

〈通釈〉うけ口のくちびるの色が変わっていくところに水を注いで、ひたすらに見つめ続ける。

〈山田〉くちびるの色が変わって死ぬ間際まで必死で水分を与えていたのだろう。それでも最後の最後まで復活を信じ、見つめ続けていた。「見つめ見つむる」に逼迫感が満ちている。

〈田中〉生まれた当初、「山羊の乳に水をわつて、ガーゼで乳首を拵へて、それに浸して飲ませた」とある。その口はやや「うけ口」で、しかし、しっかりと唇を動かして水分を吸収していたのだろう。

* 187・汝が母は看護もせず^{みとり}に別れたり母も子供もかなしかるらむ

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為に」 異同なし

〈通釈〉おまえの母は最期を見とることもなく別れとなつてしまった。母も子供も悲しかろうに。

〈山田〉利玄の妻は身体にさわらないようにという周囲のすすめにより、我が子の死に顔を見ることはなかった。亡き子供に語りかけるような口調で妻のことをいたわっている。同時に、周囲の無理解を責める気持ちも多少はあったのだろう。

〈田中〉(妻は利公の)「死顔が見度いと云つたが、神経を刺激して身体にさはつてはいけな」と云ふ皆の考で、見せず「了つた」とあり、妻はついに我が子の死に顔を見ることがなかった。

188・人々を力なき目に見まはせし汝がいぢらしき忘れかねつも

【初出】「白樺」四卷八号(大正二年八月)「利公の爲めに」

・人々を力なき目に見廻せし汝がいぢらしき忘れかねつも

〈通釈〉人々を力のない目で見回していたおまえのいぢらしきを忘れられない。

〈山田〉見開いた目や水分をとろうとするくちびると同様に、「力なき目」であっても利公は間違いなく生きていたのだという思いを訴えている。

〈田中〉175・176・185と、利公の「眼」が印象深く詠われている。ここは「目」の字が用いられているが、原文のママである。

189・汽車の笛遠くひゞきて夜はふけぬ我が子の傍そばに通夜して居れば

【初出】「白樺」四卷八号(大正二年八月)「利公の爲めに」

・汽車の笛遠くひゞきて夜はふけぬ我が子の傍そばに通夜して居れば

〈通釈〉汽車の笛が遠く響いて夜は更けてゆく。我が子の傍で夜通し付き添って祈っていれば。

〈山田〉遠くから聞こえる音を、利玄は幻のような郷愁を感じるものとして描く。我が子の死という重すぎる現実の前に、遠い汽笛が別世界のようにして過ぎ去っていったのだろう。それは我が子の魂がこの世を去ってゆくイメージと重なっている。

〈田中〉これは一年が経って、ようやく客観的に描写が可能になったものであろう。映像を見ているような上の句でもある。

*190・いとし子のつめたきからだ抱きあげ棺にうつすと頬ずりをする

【初出】「白樺」四巻八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・いとし子の冷きからだ抱き上げ棺にうつすと頬ずりをする

〈通釈〉愛しい子の冷たいからだを抱き上げて、棺にうつすとき頬ずりをする。

〈山田〉亡くなった我が子を抱き上げる最後の機会が、棺にうつすときだった。そのときあまりに愛しい気持ちから頬ずりをしてしまった。人目を気にしている思いすらもうなくなっていたのだろう。

〈田中〉163「女の子頬ずりしたし」も思われるが、何より子どもを手放したくない気持ちで、頬を寄せるといふ直接の行為に表れているだろう。

*191・友禪のをんなのごとき小袖着て嬰兒は瓶の底にしづみぬ

【初出】「白樺」四巻八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・友禪の女の如き小袖着て嬰兒は瓶の底にしづみぬ

〈通釈〉友禪染の、女物のような小袖を着て、嬰兒は瓶の底に沈んだ。

〈山田〉棺に入れて火葬にするときの亡くなった我が子の服装が、女子向けのような華やかな友禪染だった。一般に棺に瓶は入れないので、「瓶の底にしづみぬ」は骨瓶の中に入ることを示す隠喩であろう。また海の底に沈むイメージも重ねているのかもしれない。

〈田中〉菱川(1973)によると、友禪染は「多彩華麗な絵模様」に特色のある染織」とのこと。華やかで、女子向けの印象もあるが、ここではそれを着せて瓶の底に沈ませたのだろう。華やかさがかえってかなしみを際立たせる。

* 192・父母の涙ぬぐひしハンケチを顔にあてやり棺ひつぎにをさむ

【初出】「白樺」四卷八号(大正二年八月)「利公の爲めに」

・父母の涙ぬぐひしハンケチを顔にあてやり棺ひつぎに納む

〈通釈〉父母の涙をぬぐったハンカチを、亡き子の顔にあててやり棺におさめた。

〈山田〉実際に葬儀の場であった行動そのままの描写であるが、父母を我が子とともに使うことができた唯一のものが涙を拭ったハンカチであるということが悲しみを帯びる。

〈田中〉「父母の涙をふいたハンケチは頬の処へあて、やつた」とあり、その描写のままの一首である。

193・小さな笠よ草履よはた杖よ汝が旅姿ゑがくにたへず

【初出】「白樺」四卷八号(大正二年八月)「利公の爲めに」 異同なし

〈通釈〉小さな笠よ草履よ、はたまた杖よ。おまえの旅姿を描写することもできないほどに悲しい。

〈山田〉いわゆる死に装束のことを「旅姿」にたとえている。宗派によってはこのように、笠や草履をつけて善光寺な

どに巡礼することを想定した服装にさせるらしい。そしてあまりにつらくてその姿を描写することにさえたえられないという気持ちがあらわれている。

〈田中〉彼岸への手続きとしての「旅姿」。だが、一七〇〇グラム余というあまりの小ささが、さらに涙を誘うのだった。

* 194・人形を相手となしてな泣きそ雨そぼふりて寂しき夜も

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為めに」

・人形を相手となしてな泣きそ雨そぼふりて淋しき夜も

〈通釈〉人形を話し相手として、泣くなよ、雨がそほ降つて寂しい夜も。

〈山田〉亡き子に対して呼びかけている歌。「な泣きそ」は万葉調の字足らずのフレーズである。棺に人形を入れておき、これを話し相手と思つて送るから寂しがるなよと呼びかけている。

〈田中〉棺には、「人形や歌をかけた紙を入れてやつた」とあり、それらを彼岸でのなぐさめとしたのだった。

195・安らかにあれかし今はわが力及ばねばたゞそのみをこそ

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為めに」 異同なし

〈通釈〉安らかにあれ。今は私の力が及ばなかった、ただそれだけのことだ。

〈山田〉前に続いて亡き子へと呼びかけている歌で、「安らかにあれかし」と強く祈っている。ある程度気持ちの整理がついていたのか、誰も責めずに諦念の境地に入っている。

〈田中〉「安らかにあれかし」という願いは、客観的に、「白樺」三卷九号（大正元年九月）の「編輯室にて」にも描写

されている。筆者(『小生』)の署名は「ゴロツキ」。「お葬式のある日の朝小生がお寺を聞くつもりで電話をかけたら木下自身が電話口へ出た。その時は葬式が出たあとで『子供の葬式に昔から親は送らないものださうだから、それに母親が淋しがるからね』と云つて木下は家に残つて居た」。家に残り、ただただ安らかな旅路を祈つていたのだろう。

196・木の繁る上野の奥の土しめる谷中の墓地にわが子葬る

【初出】「白樺」四巻八号(大正二年八月)「利公の為に」 異同なし

〈通釈〉木の繁る上野の奥の、土の湿る谷中の墓地に我が子を葬る。

〈山田〉上野の谷中霊園に我が子を葬つた際の歌。「木の繁る上野」「土しめる谷中」という対句を用いて、谷中の風景が土俗的に地を感じられるような効果が出ている。

〈田中〉「あの上野の奥の、地面のしめつた谷中の土の底へ葬つた」とある。上野の谷中霊園である。望月謙二「木下利玄——傷心の旅——」(京都女子大学宗教・文化研究所「研究紀要」第十五号 二〇〇二年二月)によると、現在は、鎌倉報国寺の木下家の墓に改装合祀されているという。

*197・墓地の杉蟬はなげどもいとし子は姿も見えず土に入りつ、

【初出】「白樺」四巻八号(大正二年八月)「利公の為に」 異同なし

〈通釈〉墓地の杉に蟬は啼いても愛しい子は姿も見えず、土に入ってゆく。

〈山田〉夏であったため、谷中霊園の杉に蟬がいてたくさん鳴いていたのだろう。我が子と一緒に蟬とるをする未来もあつただろうがそれは叶わず、姿も見えないまま土に入ってゆくという悲しみを詠んでいる。蟬の一生のはかなさと重ねている部分もあるだろう。

〈田中〉「子を失ふ悲は悲しいものだと思った」「その後はボンヤリして生れたり死んだりして騒いだのが夢のやうに思はれて、可笑しいやうな変な気がした」「しかし全然忘れられはしない。又忘れてやりたくない」という言葉の通りの歌である。

198・寺の門敷石の上にさくら木ぎの黄なる葉散れり晩夏の日照ひでり

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為めに」

・寺の門敷石の上に桜木の黄なる葉散れり晩夏の日照

〈通釈〉寺の門の敷石の上に桜の木の黄色い葉が散った、晩夏の日照り。

〈山田〉この寺は当時谷中霊園に隣接していた天台宗天王寺と思われる。黄色くなりはじめた桜の木の葉が散ったところに晩夏の日照りがさし、夏の終わりを予感させる。この散った葉は亡くなった我が子の命の象徴であり、季節の終わりの予感新しい日々が始まることの予感でもある。

〈田中〉写実的な切り口で、「散」る葉が、散った命を屹立させている。

199・子の生れ子の死に行きし夏すぎて世は秋となり物の音すむ

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の為めに」 異同なし

〈通釈〉子が生まれ子が死んでいった夏はすぎて、世間は秋となり物音が澄む。

〈山田〉利玄にとって夏は子が生まれて死んでいった騒がしい季節であった。それが過ぎていって、大切なものを喪つたまま静かで平穩な日常へと入ってゆく。この夏と秋との対比は、これまでも幾度も歌の中で使われている。

〈田中〉178・179と似た「秋」の歌ではあるが、これは一年を経た大正二年当時にもまた巡ってきた「秋」をさすのだろう。

* 200・遠方をちかたに鍛冶屋かねうつ音すみて秋や、うごく八月のすゑ

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・遠方に鍛冶屋かねうつ音すみて秋や、動く八月の末

〈通釈〉遠くの方に鍛冶屋の鉦を打つ音が澄んでいて、秋がやや動く八月の終わり。

〈山田〉やはりここでも、虚実のあわいにあるものとして「遠くから響く音」が使われている。鍛冶屋の鉦を打つ音は澄み切っていて、しかし単調である。静かな秋も、ほんの少しだけ揺らめいている。忙しすぎた夏が終わってゆくことをさらに深く感じることになった瞬間である。

〈田中〉鉄を真つ赤に焼き、一定のリズムで反復するような「鍛冶屋」の音。遠方から、高く、しかし鈍く、耳に届いてくるのだ。悲しみも、遠くから反復するように届いていたことを示唆しているだろう。

201・曼珠沙華か黒き土かしらに頭あく雨やみ空のすめる夕べに

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・曼珠沙華か黒き土に頭あく雨やみ空のすめる夕べに

〈通釈〉曼珠沙華が黒々とした土に頭をあげる。雨がやんで空が澄んでいる夕べに。

〈山田〉「か黒き」は「黒々とした」の意。曼珠沙華は死の象徴であり、雨がやんで空が澄み渡り何事もなかったかのように秋に入ってゆく夕べに、かすかに我が子の死の記憶を主張している。

〈田中〉初出では、この歌の前に「曼珠沙華灯とます頃の近づけば幼きものを又おもひいづ」があつたが、歌集未収録である。

202・墓ならば谷中の墓地に利公も小さき墓標を立ててねむれり

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・墓並ぶ谷中の墓地に利公も小さき墓標を立て、眠れり

〈通釈〉墓の並ぶ谷中の墓地に、利公も小さき墓標を立てて眠っている。

〈山田〉連作の題には使っているが、我が子利公の名前を直接歌に詠み込んでいるのはこの歌のみである。墓の幾多並ぶ墓地の中に、小さき墓標が立っているとところに哀切がきわまっている。

〈田中〉客観的な説明の歌であるが、どんなに墓が多く並んでいても、我が子の眠る場所は親にはわかる、という思いだろうか。

* 203・若き母^か頭痛むに手を当て、むかふわが子の墓標の白さ

【初出】「白樺」四卷八号（大正二年八月）「利公の爲めに」

・若き母^か頭痛むに手を当て、向ふ我子の墓標の白さ

〈通釈〉若い母が頭痛に手を当てながら、向かう我が子の墓標の白さよ。

〈山田〉この「若き母」は利玄の妻のこと。母となった途端に我が子を失い母ではなくなってしまうた妻を、あえて「若き母」と表現し、まだ真新しい墓標の「白さ」と重ねて、「大切なものを喪ってまだ間もない存在」であることを強調している。早々に我が子を失いその死に顔を見ることが出来なかったストレスが頭痛を導いたのだろう。

〈田中〉墓標がまだ新しく、「白さ」が目染みる光景である。しかも、老母ではなく「若き母」であり、新婚早々の悲報であったことも頭痛の遠因であろう。

204・線香の煙墓標をめぐれるを二人ふりむき去りがてにする(大正元年八月―九月)

(九二)

【初出】「白樺」四巻八号(大正二年八月)「利公の爲めに」歌は異ならないが、「(大正元年八月―九月)」はなし

〈通釈〉線香の煙が墓標のまわりをめぐっているのを、二人振り向いて、立ち去ることができないでいる。

〈山田〉「去りがて」とは「去ることができないで」の意。線香の煙が墓標のまわりをまわっているのを、我が子の魂が「行かないで」と言っているように感じられたのだろうか。夫婦が同じ墓標の方向をともに見つめている情景が映像的で印象に残る。

〈田中〉初出では、この歌の後に続けて、「今年利公の一周忌にこの文と歌とを集めて、あの世にも可愛らしかった小さい顔を偲ぶ」とまとめている。また、後年、利公の夭折が「深刻な経験でしたから『銀』の中でもこの時の歌は力のあるものと思つてゐます」(「道」(新家庭)大正十一年八月号)と回想している。人の心を撲たすにはおられない連作である。

(以下、次号に続く)